

Title	<論文>日本橋小網町街並み商業史覚書
Sub Title	Historical Study of Commerce of Downtown in Tokyo : Case of Koami-cho,Nihonbashi
Author	白石, 孝(Shiraishi, Takashi)
Publisher	
Publication year	2003
Jtitle	三田商学研究 (Mita business review). Vol.45, No.6 (2003. 2) ,p.41-
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234698-20030200-00152624

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本橋小網町街並み商業史覚書

白石 孝

<要 約>

本稿は日本橋の古い町、小網町の江戸—明治における街並み商業史である。ここは江戸初期ではいわゆる江戸湊であったが、江戸造成にともない、このあたり一帯は内港となり、移転した江戸湊からの荷受港の1つとなった。この小網町は、後背地が大木屋敷地で、片側だけの川辺町という特徴をもち、また南茅場町とは渡し舟しかなく、土地柄としては、かなり限られた商業地＝中島型商業地であった。1丁目から3丁目まで、様々な問屋が分布していたが、ここに発展したのは、米・酒・塩・醤油・油の諸問屋であった。しかし、ここは多くの奥川筋船積問屋にみるように、下りものと関東地廻りものの接着点でもあり、また関東への物資の発船地でもあった。

もっとも、明治になって、この町の後背地も商業地となり、鎧橋により南茅場町を通じ日本橋南部・京橋の町々と連結するようになって、江戸時代とは異なり、商業圏は拡大し、町の商業地としての価値も高まる。本稿ではこのため、明治前期と30年代の街並みを比較するが、そこでみられたのは、江戸時代からの伝統的なこの町の商業、塩・醤油・油に加え砂糖の問屋が更なる発展の中核になり、一方では多くの舟積問屋・船宿があるという風景であった。分析も主にこの4業種の問屋にむけられる。そしてこれが、この町の土地所有についても様々な形で現われていることを指摘する。最後に、この町と近接の町々、小舟町、堀江町4丁目、蛸殻町、北新堀町、箱崎町、茅場町の平均地価を比較し、小網町の商業地としての高い評価に及ぶ。

<キーワード>

江戸湊、河口洲、荷受港、武州豊嶋郡江戸庄園、中島、小網町、崩れ橋、稲荷堀、鎧の渡、蛸殻町、東京米穀取引所、関東地廻りもの、奥川筋船積問屋、武州会所、米河岸、行徳塩、下り塩、地廻塩問屋、十州塩、塩廻船、醤油問屋、油問屋、地廻水油問屋、内陸型商業地、中島型商業地、川辺町、川舟積問屋、船宿、東京商人録、末広河岸、鎧河岸、砂糖問屋、東京砂糖問屋組合、東京廻船食塩問屋・仲買組合、明治9年地主名鑑、明治45年地籍台帳、土地所有集中係数、町内地主比、平均地価比較

はじめに

本稿は前稿の「日本橋兜町・茅場町街並み商業史覚書」(本誌45-2)に続き、日本橋川をはさむ対

岸の古い町、小網町の江戸・明治における街並みの商業史的展望である。もちろん、この分析視点は、これまで各町について記してきたように、商業地としての町の時代的特徴の抽出にある。これまでの研究でも町誌としてのものを別として、小網町をこの角度から、しかも江戸—明治という時代を通して描いたものは稀有である。その意味からも、本稿に作成した10に及ぶ表が、この町の商業史の研究に役立つならばと思う。なお、小網町1丁目については、筆者の「日本橋堀江町・小舟町商業史覚書—問屋と街」(本誌41-2)で、小舟町1丁目との関連で触れてある。本稿で明らかになるが、同じ小網町でも、2・3丁目とは、かなり異なった特色をもつ街といえるであろう。

以下、まず1で小網町という古い町の土地柄が江戸—明治にかけて変化してゆく跡を素描する。

1. 町の時代的変遷素描

小網町は歴史的に江戸湊の内港として特徴づけられる。

もっとも、慶長の江戸城造成の頃は、この辺りは江戸湊そのものであった。まだ江戸の前島は海辺で楡形の埠頭であって、そこに資材運搬の廻船が着岸していた。その頃の小網町は日本橋川口の「河口州」の「中島」にすぎなかった。

しかし、その後、前島の海辺の潮干潟が埋められ、八丁堀、霊岸島が次々に造成されるが、小網中島も東の海洲部分が拓開されて、この一部分に取りこまれ、この辺り一帯は日本橋川沿岸を中心とする江戸湊内港へと変貌してゆくのであった。江戸湊は隅田川口沿岸の佃沖や深川沖から築地・芝高輪の湾岸地帯に移り、日本橋川沿岸はこれらのいわゆる外港からの「荷受港」¹⁾に変わるに至る。図1の武州豊嶋郡江戸庄図は、この移行期の姿を示しているといえよう。

なお、この図で注目されるのは、後の箱崎川とよばれる隅田川口からの流れが、この頃にはまだ日本橋川に直接繋がっておらず、小網町も周りを川に囲まれた「中島」のような形を残していることである。事実、東側も後のように稻荷堀といった入堀でなく、川が東堀留川に流れこんでいる。

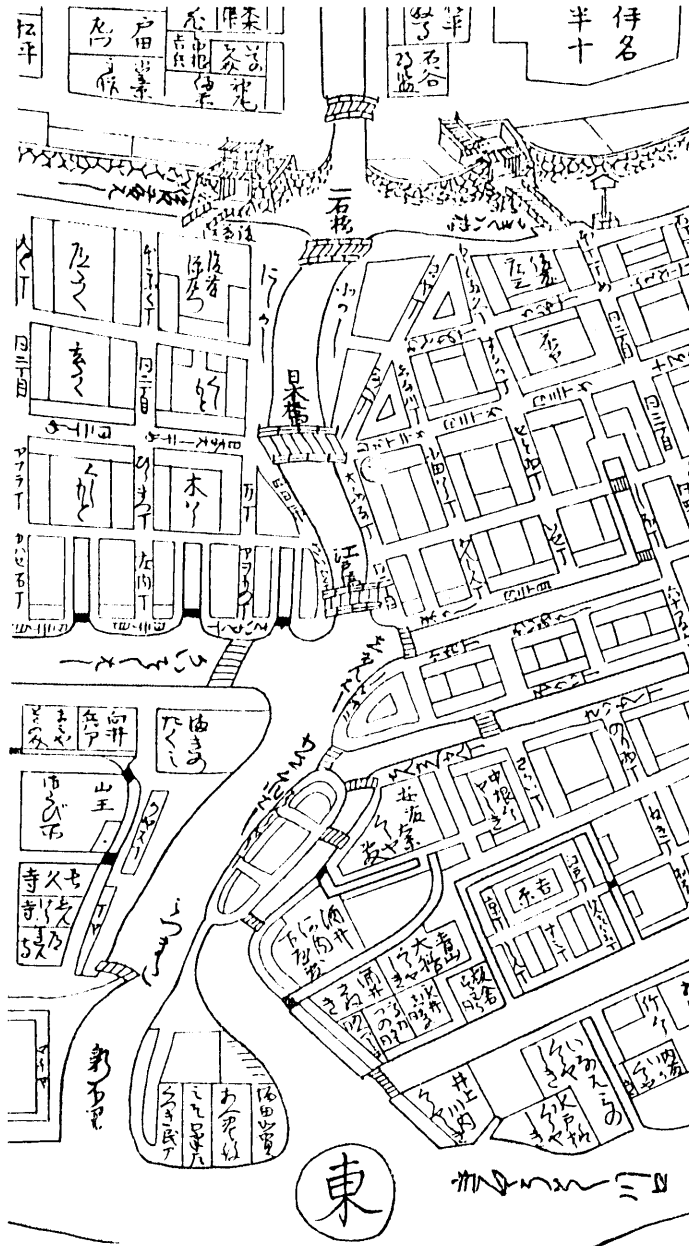
更にこの図のように、小網町の東側の隅田川までの海洲の埋立地は、その一部を武家地として造成したものの、まだ埋立地の土を得るために開削した跡の堀が雑然としたままで、中央部の葭葦が茂っているところは、各地の遊女を集めて吉原遊廓がつくられるなど、いかにも応急の土地開拓を思わせるものであった。²⁾これが武家地を中心に整然としたものに造成されるのは、吉原が明暦の大火で焼け浅草に移転した後の延宝、元禄の頃であったろう。

元禄には箱崎の東端、北新堀から深川に永代橋が架けられ、この海洲の埋立地に、享保の頃、武家地の一部に箱崎町が出来、霊岸島との間の新堀川によって日本橋川が結ばれるに至る。これによ

1) 『東京市史稿・港湾第1』p. 269, 『東京府史・行政篇』第4巻p. 273, 「荷受港」について鈴木理生『江戸の都市計画』p. 246

2) 菊地山哉『五百年前の東京』p. 145

図1 武州豊嶋郡江戸庄図



(寛永江戸図)より

り、隅田川河口から日本橋川には、この新堀川と箱崎川の2本の流れが整えられることになる。図2はこれらの時代的変遷の末にみられた小網町界隈の略図である。

この図のような小網町は、地形的にみると、東西堀留入堀に囲まれた小舟町・堀江町地区の先端の1丁目と思案橋で結ばれ、3丁目からは箱崎町に「崩れ橋」(箱崎橋)³⁾により結ばれていた。し

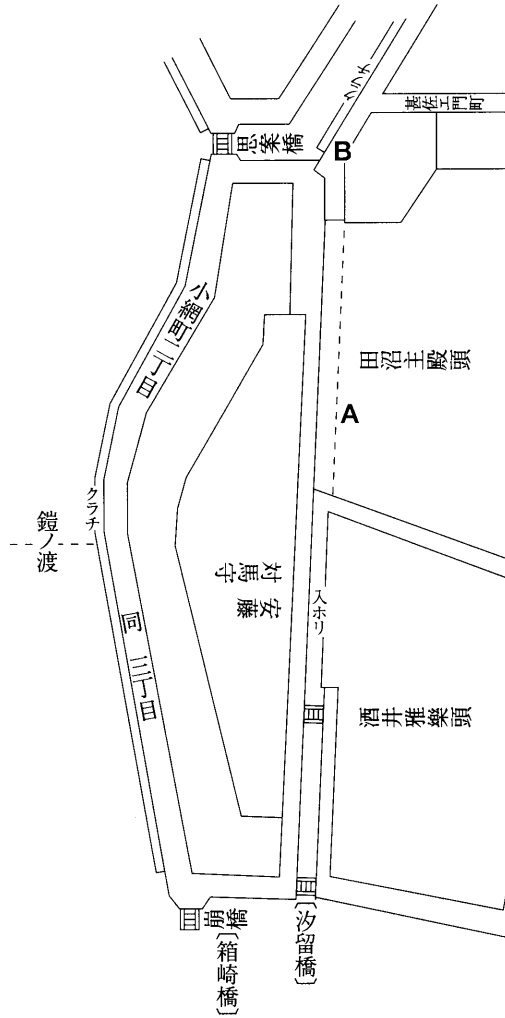
図2 江戸時代小網町のロケーション略図



かし、この小網町本体は日本橋の南之部にあたる江戸前島や南茅場町、八丁堀のような日本橋対岸地区とは架橋されておらず、鎧の渡で繋がっているにすぎなかった。この地形は、後述するように、

3) 近藤義休『新篇江戸志』p. 53

図3 安永年中の稲荷堀



【日本橋区史】参考畫帖 219-3 より

小網町の商業圏を大きく制約するものであったといえる。

更に、小網町の特徴は図3で示されているように、西は日本橋川、東の背面には大名屋敷があって、細長い片側町であったことである。実際、小網町2・3丁目の背面は安藤対馬守中屋敷で、この屋敷の東側には稲荷堀を境に田沼主殿頭・酒井雅楽頭の屋敷があって、全く町屋はみられない。しかも、この稲荷堀も安永8年には図のAのように、その北部が埋められ、それまでこの稲荷堀に架けられていた小網町と甚左衛門町との間の熊暮橋Bも廃されている。まさに小網町2・3丁目の背面は大名屋敷ばかりの侘びしい地帯であった。

かくして、小網町の本体ともいべき2・3丁目界限は、日本橋川に面した荷揚場として賑った

としても、鎧の渡あたりは葭が茂り、夜間はもちろん渡れず、町の背面は上記のような大名屋敷堀が連なって婦女子の通行も物騒であったし、日本橋の商業地へは思案橋を渡って照降町を通ってゆかねばならないという街であった⁴⁾。そこに小網町の商業地としての特徴的な姿があったということができよう。

しかし、こうした小網町の姿も、明治になって一変する。

第1はいうまでもなく、大名屋敷の消滅によりこの跡に新しい町が誕生したことである。まず小網町2・3丁目の東背面の安藤対馬守と尾張徳川の屋敷跡は、明治5年に小網町4丁目となり、稲荷堀東面の姫路の酒井忠邦と鶴舞の井上正直の2藩の邸地は、蛸殻町1丁目となった⁵⁾。もっとも、蛸殻町1丁目界限は、依然として旧福井藩主松平茂昭や旧久留米藩有馬頼匠の屋敷があつて、特にこの「福井藩邸などは随分広い庭に、名も知れない老木がうっ蒼と茂っていて、夜などあまりの静けさに物恐ろしい感じさえ抱かせたもの⁶⁾」という。また芳町に近い1丁目に3,000坪の西郷隆盛邸があつて、いわば、この界限は、明治の初め頃はまだ町場ではなく、以前の大名屋敷地と変らぬ静かな屋敷町であった⁷⁾。

この蛸殻町が新商業地になるのは、直接には、明治9年の「東京米穀取引所」の1丁目2番地の設置によるといってよい。すでに明治初年に東京商社や東京米市場が小網町に設けられ、定期米の売買が行われたが、明治7年になり、ここ蛸殻町に「中外商行会社」ができて同じく米の売買を行っていたところ、明治9年に東京商社の方は「東京兜町米商会所」に、中外商行会社は「東京蛸殻町米商会所」となり、明治16年に合併して「東京商会所」と改称されることとなる。その結果、この界限は、米穀仲買人が軒を並べるに至り、急速に商業地として発展をみせるのであった。蛸殻町1丁目の人口が、明治5年には、わずか458人であったものが、明治16年に2,350人と急増しているのもこれを示しているといえよう⁸⁾。そして、このような蛸殻町1丁目の商業地化は、小網町の商業活動に大きな影響を与えるに至ったことはいうまでもあるまい。

明治における小網町の周辺の第2の変化は明治5年の鎧橋の完成であった。江戸時代には、すでに述べたように、小網町から築地、八丁堀へは鎧の渡し舟によらざるをえぬ不便さがあつたが、明治5年、三井・小野・島田の三家が自費で鎧橋を架設し、これにより、人形町通り—小網町—兜町—八丁堀—築地の往来が容易になったのであった。これは小網町自体はもちろん、人形町通り界限の商業環境を一変するものにほかならなかつた。いわばそれは堀留町商業圏と小網町・蛸殻町商業圏、茅場町・八丁堀・築地のような日本橋南東部商業圏を直結するものであった。

4) 白石孝『日本橋街並み商業史』p. 188

5) 『東京府志料』p. 271

6) 『中央区史』(上) p. 144における岡倉由三郎の記

7) 白石孝『江戸明治大正日本橋界限の間屋と街』pp. 70-71

8) 明治5年は『東京府志料』、明治16年は『日本橋区史』による人口数字

表1 小網町奥川筋船積問屋名(文久)

丁目	奥川筋船積問屋名	3丁目	
1丁目	石橋屋久兵衛	〃	久井屋理右衛門
2丁目	鳶屋宇八	〃	布川屋庄左衛門
〃	小室屋定次郎	〃	河内屋佐兵衛
〃	山口屋清六	〃	絹川屋茂兵衛
〃	伊世屋藤兵衛	〃	土浦屋太兵衛
〃	利根川平八	〃	加田屋長右衛門
〃	坂井屋勝太郎	〃	廣屋吉右衛門
〃	常陸屋治郎兵衛	〃	金子屋紋兵衛
3丁目	伊藤屋藤七	〃	宮尾善兵衛
			乙女屋文吉

鹿島浦舟『江戸の夕栄』及び『江戸十組問屋便覧』より作成

2. 江戸時代の小網町

江戸時代の小網町は、すでに述べられたように、江戸湊の内港という性格を持った町であった。様々な種類の下りものや関東地廻りものの荷が陸揚げされ、これにかかわる店々が、この町の街並みを形づくっていたとみられる。そして、ここの河岸には数多の船が出入し、あるいは繋船され、この辺りの船は日本橋川の3分の2に達するほどの賑わいだったという。⁹⁾

毎夕、この小網町1丁目思案橋側から、五大力船の登戸曾我野行の木更津船が発船し、小網町3丁目の行徳河岸より上総・下総ゆきの乗合船が出、その河岸には乗降の船客の便のために数軒の船宿もあった。¹⁰⁾

小網町に数多くの奥川筋船積問屋があったのも、こうした町の特徴をよく示すものである。文久期のこの問屋をみると、表1のように、1丁目に1店だが、2丁目に7店、3丁目には11店を数える。これにより、同じ小網町でも、やはり箱崎川から日本橋川に入る辺りと江戸川橋からの日本橋川に接する辺りに、船運の中心があったことがうかがえる。

実際、江戸の奥川船積問屋仲間がいつ頃から創業したか確かではないが、明暦3年の江戸大火後に、この小網町2丁目と3丁目の間に、関八州船積問屋があったことから、この歴史をたどることができよう。¹¹⁾

もちろん、江戸に入ってくるものの代表的なのは米であった。小網町の背面にあった尾張家では年々収納米の中で2~3万石を江戸に廻し、扶持米を支払い残余を売払ったが、この蔵屋敷がそこにあったことはよく知られている通りである。しかし、一般の武士の収納米について、勝手不如意

9) 鹿島浦舟『江戸の夕栄』p. 47

10) 前掲書 p. 46

11) 伊藤好一『江戸地廻り経済の形成と関東農村』p. 236

表2 小舟町1丁目, 小網町1丁目米問屋(嘉永4~幕末)

小舟町1丁目	⑮松坂屋徳兵衛		⑨美濃屋富三郎	安政4加入	⑳鹿島甚太郎	③	
(下り米屋仲買)	⑯若狭屋和吉	嘉永5加入	⑩柁屋庄助	" 6 "	(地廻り米穀問屋)		
①飯村新八	⑰玉屋新兵衛		⑪伊勢屋太郎	文久7 "	㉑伊勢屋佐吉	⑤	
②吉川屋栄吉	⑱奈良屋	嘉永5加入	⑫柳屋八蔵	元治元 "	㉒銭屋伊助	文久3讓受	
③江戸屋庄兵衛	⑲伊勢屋房蔵	元治元 "	⑬田中屋長吉	慶應元 "	㉓新井屋金太郎	" 2 加入	
④島田屋清七	㉔多喜屋甚平	慶應2 "	⑭伊勢屋竹之輔	" 元 "	㉕上野屋大助	" 2 讓受	
⑤川越屋喜兵衛	㉕伊勢屋恵三郎	" 3 "	(関東米穀三組問屋)			㉖柁屋善蔵	" 3 加入
⑥内田屋清兵衛	㉖金屋善蔵	" 3 "	⑮久住伝吉	安政2転入①	㉗絹屋誠三郎	慶應2 "	
(関東米穀三組問屋)	小網町1丁目		⑯田丸屋半次郎	元治元讓受	㉘鍋屋平助	" 2 "	
⑦飯村新八	(下り米屋仲買)		⑰丸屋勝次郎	慶應元 "	㉙中村屋定七	" 3 "	
⑧島田屋清七	①久住屋伝吉		⑱三倉屋東七		「嘉永諸問屋名前帳」より。 加入・讓受無記入のものは 嘉永4年時の問屋。表1-1 はこの数。 白石孝「日本橋堀江町・小 舟町商業史覚書」掲載。		
⑨吉川屋栄吉	安政4転店		⑲薦屋卯八	嘉永5加入			
⑩常陸屋大助	嘉永7休業		㉑堺屋辰治郎	安政3 "			
⑪田島屋松兵衛	万延元加入		⑳和泉屋忠次郎	" 5 "			
(地廻り米穀問屋)	④笥屋鉞太郎		㉒柁屋庄助	" 6 "			
⑫上総屋吉五郎	⑤伊勢屋佐吉		㉓明石屋卯三郎	慶應3讓受			
⑬釜屋源右衛門	⑥堺屋辰次郎		㉔川越屋喜兵衛	万延2加入			
⑭能登屋七兵衛	安政3加入		㉕伊勢屋太郎助	元治元 "			
	⑦山屋喜五郎						
	" 4 "						
	⑧上総屋清蔵						
	" 4 "						

の武士のそれを引請け、米前金の名目で金利をとって貸す「武州会所」が小網町3丁目にあったように、小網町の米商いは盛んだったといえる。しかし、江戸に入ってくる米には、下り米、奥州米の外に関東各地よりの地廻り米があったが、これを扱う米問屋・仲買は、特に伊勢町・本船町や小舟町・堀江町、それに小網町1丁目に群居していた。特に、この中で小舟町1丁目と小網町1丁目に多く、この辺りを「米河岸」といった。これについて、すでに以前、拙稿「日本橋堀江町・小舟町商業史覚書」で記したことがあるが、これらの問屋をみると表2のようである。¹²⁾

これは嘉永4年とそれから幕末にかけて加入・讓受・廃業などの表である。これから次のような2つの特徴を見出すことができよう。その第1は、いずれの町においても、下り米仲買の増加よりも関東米穀三組問屋や地廻り米穀問屋の増加の方が顕著であったことである。それは一般的に、米の上方依存の低下、陸羽米や関東地廻米などが着実に増えてきたことを反映したものであった。第2は、小網町1丁目の米問屋の著しい増加である。表のように幕末にはこの町のその総数は34店に達する。これは江戸湊への米の送り先、産地の変化や廻漕の経路、それに次第に上昇をみせた運賃などの社会的影響を反映したものであったが、他面では、以前から問題であったが、堀留川入堀の潮の干満時の水位が大きく、またこの辺りは、芥船からの芥が落ちこみ、そのために堀が埋まり、¹³⁾度々入堀浚いをせざるを得ないという悪条件も加わった結果でもあった。その点からも、小網町河

12) 白石孝「日本橋堀江町・小舟町商業史覚書—問屋と街」(『三田商学研究』41-2)

13) 『東京市史稿・産業篇18』pp. 677-678

岸の方が条件が良かったことは事実である。

こうして、小網町1丁目は米商が多かったので、里俗「米屋町」ともよばれた。¹⁴⁾

江戸湊の内港に荷揚げされた商品に酒があり、文久2年の酒問屋人別書上では74人があげられているが、その多くは呉服町、伊勢町、中橋下槇町、坂本町、茅場町であり、特に北新川に群居していたことは知られている。しかし、小網町では下り酒問屋として川内屋善右衛門、地廻りものでは高崎屋長右衛門の名があるだけであった。¹⁵⁾

むしろ、ここで小網町とのかかわりで重要なのは地廻り塩——特に行徳塩と下り塩の取引であろう。

いうまでもなく、行徳の塩田の確保と江戸への輸送路の整備は家康入国時より早くも始まったが、そのための小名木川の開削は、本行徳村と小網町とを結ぶ大動脈のような役割をもつものにほかなかった。¹⁶⁾ それだけに、行徳と小網町とは、塩の道として歴史的に結びついていたといえる。「本行徳河岸場より小網町行徳河岸まで河路三里余」とある。¹⁷⁾

行徳の塩は、その大半が江戸の地廻り塩問屋に送られるが、その方法は、行徳河岸の船頭が請け負い、地廻り塩問屋へ船で運んで、問屋は当時の赤穂塩の相場と照らした上で仕切金を船頭に渡し、その受取代金の内、領主に支払う塩年貢の代金納分を差引いた額を収入とするといったものであった。¹⁸⁾ 問題はこの塩の江戸府内での販売で、この行徳塩は一部は「冥賀年貢」として江戸城御数寄屋に納められるが、残りは棒手振の行商人によって町々に売られ、その日の夕方までに売れ残ったものは、¹⁹⁾ 最寄りの懇意なものに預けるといって、これを塩屋と²⁰⁾ いった。享保9年に地廻り塩問屋ができるが、それはこの塩屋を母体とするところから、その地域は江戸市中に分散することとなる。小網町が行徳と塩の道で結ばれていても、そこに地廻り塩問屋はわずかしかない。嘉永4年の再興問屋名前をみてもそれは小網町1丁目に有田屋庄助、3丁目に廣屋吉右衛門、絹川屋茂兵衛の名があるのみである。²¹⁾

もちろん、江戸に移入された塩は、その大部分が下り塩であった。寛永末から元禄にかけて、江戸には瀬戸内塩(十州塩)が大量に移入され、享保の頃はこうした下り塩の²²⁾ 全盛時代といわれる。そして、この下り塩の問屋は日本橋川に入る南北新堀町河岸に店をかまえていた。ただこの問屋は

14) 『日本橋区史』第1冊 p. 193

15) 東京酒問屋統制商業組合編『東京酒問屋沿革史』pp. 15-17, p. 55

16) 落合功『江戸湾塩業史の研究』p. 252

17) 『市川市史』第6巻上、「本行徳村村明細帳」資料, p. 240

18) 落合功「江戸内湾塩業の展開と近世社会」(『地方史研究』258) p. 85

19) 廣山堯道編『近世日本の塩』p. 286

20) 『大日本塩業全書』第1巻, 東京塩事務局行徳出張の部

21) 前掲『日本橋区史』第1冊には「小網町3丁目の南河岸, 即ち箱崎川の北岸の行徳河岸に地廻り塩問屋が多い」とあるが、同史第3冊 pp. 537-578には1丁目1店, 3丁目3店のみしか記されていない。

22) 鶴本重美編『日本食塩販売史』p. 50

表3 廻船下り塩問屋・仲買名(文政7年)

		北新堀町	加田屋彦兵衛
北新堀町	○	秋田屋富之助	小川屋重兵衛
〃	○	長島屋松之助	清水屋茂兵衛
〃	○	渡辺屋熊治郎	伊坂屋藤兵衛
〃	○	松本屋重三郎	千代倉屋次郎兵衛
小網町3丁目		廣屋吉右衛門	西宮屋重次郎
箱崎町1丁目		加田屋庄兵衛	石橋屋久兵衛
〃		常陸屋吉兵衛	橋本屋小四郎
堀江町3丁目		柏屋伝右衛門	柳屋藤兵衛
伊勢町		永楽屋善之助	水戸屋次郎兵衛
須田町2丁目		三河屋宗兵衛	
北新堀町		伊勢屋茂平	
〃		徳島屋市郎兵衛	
		北新堀町	
		〃	
		南新堀町1丁目	
		〃 2丁目	
		〃 2丁目	
		南茅場町	
		〃	
		〃	
		〃	
		深川平野町	
		○ 廻船下り塩問屋	
		江戸買物独案内	
		仲買21名中3名休廃業	
		『日本食塩販売史』pp. 99-100より	

十組問屋仲間には加盟していなかった。これは下り塩なるものが、早くから大坂の問屋を経由することなく、瀬戸内地方に発達した「塩廻船」によって江戸に直送されていた結果とみなされている。²³⁾

この塩廻船というのは、菱垣廻船や樽廻船と異なり、船頭自らの裁量で産地で塩を買い積み、これを江戸に運び、廻船下り塩問屋により所定の仲買達に売るというものであった。文化6年に、結局この廻船下り塩問屋・仲買は十組問屋に加入するが、当時の問屋は4人、仲買は21人であった。この所在及び商人名を文政期の「江戸買物独案内」からみたものを、『日本食塩販売史』より引用すると表3の如くである。しかし、この表にあるように、問屋の4人すべてが北新堀町にあり、仲買もその多くが北新堀町、南新堀町及び南茅場町の商人で、小網町には3丁目の廣屋吉右衛門のみである。しかも、この廣屋吉右衛門は、すでに述べたように地廻り塩も扱い、かつ醤油問屋の本店でもある。

もっとも、下り塩仲買・問屋には、塩以外のものを扱う兼業者が多いのが特徴といわれる。事実、上記の者のうち7名もこの兼業者であるが、特にこのうち6名は醤油問屋を兼ねていた。それは原料としての塩を購入し、製品として醤油を江戸で販売するためでもあった。²⁴⁾

江戸という大消費都市だけに、十組醤油酢問屋は多く、文政期には70軒もあったが、小網町には3丁目に、熊野屋佐兵衛、山本屋清兵衛、釜屋浅右衛門、松屋源右衛門、それに廣屋吉右衛門の5軒があった。²⁵⁾

このうち廣屋吉右衛門店は、箱崎橋北詰の行徳河岸の角地にある本店であった。この店は、元禄

23) 廣山堯道、前掲書 p. 251

24) 落合功「江戸湾塩業史の研究」p. 285

25) 金兆子『醤油沿革史』pp. 18-23

期に銚子でヤマサ醤油の醸造を始めた廣屋儀兵衛店が、原料の塩の確保と醤油の販売を目的に、享保の頃、廣屋吉右衛門に小網町で店を開かせたのに始まるという²⁶⁾。もっとも、当時は下り醤油の圧倒的な時代だったから、実際は開店当初は塩の取引が主であったらしい²⁷⁾。そして、天保の頃には、塩・醤油・奥川筋船積問屋を営み、小網町だけでは手狭になり、箱崎町1丁目に下り塩の分店を出すに至る²⁸⁾。また、文化・文政期に江戸入の醤油が地廻りものによって占められるようになると、銚子から醤油を仕入れ、この空船に塩を積んで銚子へ船を帰すという奥川筋船積問屋の役割は大きなものになっていった。事実、文政4年、江戸入1ヶ年の醤油125万樽の中で、大坂表よりのものは2万樽で、他は悉く総・常・野のもので、関東八組造醤油仲間は、銚子組20、野田組19を数えるとある²⁹⁾。

かくして、小網町にはこの奥川筋船積問屋が文政期に21軒をも数え、町の大きな特色をなすに至るが、その背景には、単なる塩と醤油の交流だけではなく、銚子と江戸小網町との間に多様な物資の交流の発展があったといえるであろう。銚子から醤油のほか大麦・味噌・酒粕が、小網町からは明樽、提灯、ろうそく、紙・筆、麻・白絹、酒・酢などが運ばれていたからである³⁰⁾。

江戸時代の小網町の商業史について、更にここに加えなければならないのは油問屋である。油は米に次で多く消費され、また物価の標準ともなったものであったからである。幸田成友はその著『江戸と大阪』において、天保12年の日本橋本船町の油問屋行事の届書により1年間に江戸入の油は、約10万樽で、江戸の相場で消費高を計ると、これが30万両余りに達し、いかに江戸市民の生活に影響を与えたかわかるという³¹⁾。それだけに、幕府の油の流通に対する保護・統制はきびしいものがあつた。

もちろん、油も下りものが圧倒的であつた。万治3年に霊岸島に「油仲間寄合所」が設立され、下り油の売買所が定められたが、元禄7年に、江戸十組問屋ができた折に、油問屋も河岸組と称して仲間組合をつくる。下り水油問屋34名であつた。次で享保11年には、この下り水油問屋のほかに、地廻り水油問屋31名が加わるように、関東地廻りの油が次第に増加をたどっていった³²⁾。

しかし、このような株仲間による流通統制にもかかわらず、寛保の頃には、この株仲間以外のものの絞油の直仕入が増え、問屋が打撃を受けるに至り、町奉行は問屋以外に油荷の引請けを禁ずると共に、本船町に油改所を設け、江戸移入の油は全てここで改めるなどの処置をこうじ、更に、宝暦9年には、摂州・紀州・中国などの産出絞油は、全て江戸への直送を禁じ、大坂油問屋へ輸送す

26) 落合功、前掲書 p. 120

27) 株式会社廣屋『廣屋300年を駆ける』p. 48

28) 前掲書 p. 200

29) 『銚子市史』pp. 350-352

30) 林玲子編『醤油醸造業史の研究』pp. 39-41

31) 幸田成友『江戸と大阪』p. 181

32) 江戸東京問屋史料『諸問屋沿革誌』

表4 小網町の水油問屋・仲買名

下り水油問屋		水油仲買	
小網町3丁目	絹川屋茂兵衛	小網町1丁目	新井屋直平
地廻り水油問屋		〃 2丁目	西村屋加兵衛
小網町2丁目	角屋重次郎	〃 3丁目	絹川屋茂兵衛
〃 3丁目	絹川屋茂兵衛	〃 〃	伊勢屋喜作
〃 〃	伊勢屋惣兵衛	〃 〃	伊勢屋惣兵衛
〃 〃	大野屋徳兵衛	〃 〃	大野屋徳兵衛
〃 〃	井筒屋謙蔵	〃 〃	升屋兼三郎

『日本橋区史』第3冊 嘉永諸問屋再興名前

るよう布令を出している。³³⁾まさに、大坂油問屋の独占的流通統制の維持にはかならない。

とはいえ、関東地廻りの生産が逐年増加をたどるにつれ、この流通秩序が幕政の課題となっていく。明和4年、関八州の綿実は全て江戸は小網町2丁目の多田屋直三郎と神奈川宿源兵衛の2軒の買問屋へ販売し、相州足柄郡早川村で絞油して、江戸の油問屋へ売り渡すよう命じ、天明4年には、関八州の菜種は手絞分及び大坂への積登分以外は、全て在方の200軒の買次を経て、江戸の2軒の買問屋——中橋広小路御用油屋升屋善太郎、小舟町の丸屋三郎兵衛——に販売し、これを絞油して御用油として一部を上納、それ以外は江戸の油問屋へ売り渡すよう命じたのであった。³⁴⁾かくして、関東地廻り油は、天保2年には江戸の年間需要量10万~11万樽のうち、30%を占め、その絞問屋も増加の一途をたどった。³⁵⁾もちろん、これには関東の綿作の発展や幕府による油菜作付けの奨励による菜種油の増産があったからである。³⁶⁾

それでは、小網町にはどのような水油問屋・仲買があったろうか。嘉永諸問屋再興名前からこれを見ると、表4の如くである。しかし、小網町3丁目の絹川屋茂兵衛は下り水油問屋・地廻り水油問屋、水油仲買の3つの看板を持っているし、また地廻り水油問屋の伊勢屋惣兵衛・大野屋徳兵衛も水油仲買に名を連ねている。そこで、水油問屋・仲買の店としては、小網町1丁目に1軒、2丁目に2軒、3丁目に5軒となる。

こうして、江戸時代における小網町をみると、それは江戸湊内港としての土地柄を反映していることは確かであるが、やはりここが下りものと関東地廻りものの接点であると共に、関東各地への物資転送の発船地でもあったという特徴をもっていたということができよう。

表5は米穀問屋を除いたこの町の主要な問屋の業種とその町別の数である。この表のように、こ

33) 大蔵省編纂『日本財政経済史料』第3 油商, p. 198

34) 前掲書 pp. 207-208

35) 谷山正道「上方経済と江戸地廻り経済」(青木美智夫編『日本の近世』17, p. 133)

36) 東京油問屋市場編『東京油問屋史』p. 56

表5 小網町問屋町別業種数(文久)

業種	業種			業種	業種		
	一丁目	二丁目	三丁目		一丁目	二丁目	三丁目
奥川筋船積	2	8	11	生布海苔	0	0	1
麻苧船貝	4	0	1	下りぬか	0	0	1
釘鉄銅物	1	0	2	明樽	0	0	1
鍋釜	1	0	3	蕨縄	0	0	1
水油(仲買共)	1	2	5	煙草	0	2	1
醤油酢	0	0	6	下りろうそく	0	0	1
下り傘	1	4	2	小問物	1	0	0
線香	0	4	1	藍玉	1	0	1
鯉節塩干肴	0	1	0	柄杓	0	2	0
干鯛/粕	0	0	2	足袋股引	0	2	0
もぐさ	0	1	0	下り塩	0	0	1
塗物	0	0	1	瀬戸物	0	1	0

江戸十組問屋便覧・江戸町づくし稿より作成、米穀問屋を除く水油問屋については本文参照

の小網町、特に3丁目には、これまで述べてきた奥川筋船積問屋、水油問屋、醤油酢問屋が多いのも、この特徴を示している。そして、その背景には、やはり、小網町そのものが、その地形から、他の内陸型商業地の町とは異なり、中島型商業地であったといえるのではあるまいか。

3. 明治の小網町街並み史

それでは、この小網町は、明治になって、どのような街並みになっていたであろうか。いうまでもなく、この町の背景に3つの重要な変化がある。すでに述べたように、その1つは小網町2・3丁目の背面の大名屋敷がなくなり、小網町4丁目という町になったこと、その2は更に東側の界限も蛸殻町という町になり、最初は静かな屋敷町であったが、「米穀取引所」のようなものが設置されて繁華街になっていったこと、その3は、兜町、茅場町との間に鎧橋が架けられ、人形町ー小網町ー茅場町、ひいては八丁堀・築地へと商業圏が結ばれるに至った変化である。特にこれらは小網町の川辺町としての商業的価値を更に高めることになったといっておくべきであろう。

ここでは、こうした背景を念頭に、明治の小網町の街並みの変化の特徴をみておきたい。もっとも、明治時代の前半については、詳細な町の商店を記した資料に乏しい。それでも、明治13年7月に大日本商人録社から刊行された「この時代に望み得る詳細な名簿」といわれる『東京商人録』³⁷⁾から、当時の小網町の街並みをかい間見ることができよう。

表6は、これから小網町のもを抽出し、この町における商いの業種分布をみたものである。実

表6 小網町の町別主要商店業種分布(明治13年)

1-1	小間物・下駄	2-7	油	3-8	鼻緒・鉄物	29	塩・川舟積。
"	烟管・川舟積	8	船宿・川舟積	9	米穀・艾・塩	4-2	料理・川舟積・船宿
3	川舟積	"	川舟積	"	船宿・川舟積		
5	帯	9	紙・塩	10	下駄・川舟積・船宿	3	肉ヤ・呉服・塩 川舟積
7	川舟積	"	川舟積	11	鉄物・川舟積	4	料理
8	川舟積・荒物	10	船宿・川舟積	13	油	5	塩
"	塩・帳面	"	川舟積	14	川舟積	6	医師・料理
9	川舟積・船宿	11	米穀・艾	15	船宿・川舟積	7	塩
"	鉄物・紙	13	時計・塩・川舟積	16	塩・川舟積・船宿	9	川舟積
10	川舟積	16	川舟積・船宿	17	油・船宿・川舟積	仲町2	時計・絵ノ具
11	醤油	19	川舟積	18	川舟積・船宿		
20	舷燈	3-1	荒物・船宿 川舟積	20	川舟積・船宿	4	筆墨・
2-1	料理・乾物			25	川舟積・船宿	26	油・川舟積
2	下駄	2	塩	27	川舟積・油	6	瀬戸物
3	鼻緒	4	醤油	28	米穀・川舟積	7	薬・宿
4	荒物・川舟積	6	油・川舟積		船宿・川舟積	『東京商人録』より抽出。 業種名のみ	
5	呉服太物	7	荒物				

はこの商人録には、同一の店の一族が名を連ねていて、いかにも店の数が多くみえたり、いくつも兼業している大店が、1つしか、それもメインでない業種に記載されていることもあって、問題が多い。しかし、この頃の小網町の街並みが、やはり江戸時代のそれを色濃く持っていたことがうかがえよう。

表には、業種のみで数は記してないが、その分布からいっても、その店の数からいっても、めだつて多いのはやはり川舟積問屋が、1丁目に6軒、2丁目9軒、3丁目18軒である。また船宿にいたっては、1丁目1軒、2丁目3軒、3丁目11軒で、合計15軒を数える。まさにこれなどは川辺町としての特徴をよく示しているのではあるまいか。

江戸時代、重要な消費財であった油の商いについては、新しい店が加わって、2丁目に亀田松藏、3丁目に表4にすでにかかげた老舗鈴木茂兵衛、これに飯島角之助、油屋吉左衛門の計4店がみられる。後に油・荒物として頭角を現す2丁目の嶋田新助店は、この商人録によると、神田市場青物問屋として記載されている。この真偽のほどはわからないが、そのほか醤油商についても、この商人録では1丁目の浅井久兵衛、3丁目の太田平兵衛、中谷長兵衛、高橋長平の4店しかなく、すでに述べた江戸時代からの大店、廣屋浜口吉右衛門店はこの業種になく、川舟積問屋のところに「広吉・浜口仁兵衛」として記されているだけである。この点も、この商人録の資料的限界かも知れない。

37) 大日本商人録社『東京商人録』湖北社刊、覆刻版凡例文

表7 小網町の町別主要商店業種分布(明治31年)

1-1	薬・小間物・煙草	2-6	油・塩・蒲団	3-7	荒物	3-27	醤油	末広河岸
"	袋物・麻苧	7	荒物・鼻緒	8	銅鉄	28	醤油・荒物・宿	砂糖・回漕業
2	油・染物	8	塩・乾物・荒物	9	塩・艾	29	醤油・運送・宿	荒物・石油。 運送
3	鉄刃物・麻苧船具	9	荒物・石油・宿	10	荒物	4-1	時汁	鎧河岸
4	紙	10	宿	11	砂糖	2	料理・魚油・古物	運送・塩
5	襖紙・宿・石油	11	洋小間物	12	鍋釜	"	絵之具	漁網
6	砂糖・運送・宿	12	土木請負	14	宿	3	陶器・砂糖・料理	
7	荒物	13	公債売買・宿	15	砂糖		薪炭・運送・雑貨	
9	荒物	14	茶・煙草	17	水油・乾物	4	菓子・足袋・酒	
11	綿糸・宿	15	足袋・銀行	18	醤油・米・明樽	"	料理・乾物	
2-1	煉瓦・宿・乾物	3-1	煙草・菓子・油	19	醤油・米	5	古物・料理・染物	
2	宿・砂糖・米		・荒物	20	下駄	6	穀物・畳・質	
"	洋服	2	株式仲買	22	鍋釜	7	瀬戸物・荒物	
3	銀行・石油	3	回漕業	24	運送・塩	9	下駄・陶器	
4	荒物・質	4	塩・石油	25	醤油・米			
5	米・太物	5	鉄	26	宿			

明治31年『日本商工営業録』より作成

こうした小網町の街並みも、明治期後半になると、再び変化をみせる。表7は明治31年の「日本商工営業録」によるそれである。³⁸⁾前表6と同じように、地番毎に業種のみを記したものであるが、1丁目から4丁目までと、別記として末広河岸と鎧河岸とをかかげておいた。

前表と比較すればわかるように、明治31年にもなると、時代を反映して新たな業種が加わったり、以前より店の数が増えたものなどがある。新たな業種の中には公債証券売買や株式仲買、銀行がみられるが、これは鎧橋によって小網町が対岸の兜町証券街と結ばれるようになった結果であったといつてよい。しかし、それにしても、それらは鎧橋の東詰にあたる場所にわずかにあったにすぎない。この町の新たな業種として注目されるのは、むしろ砂糖問屋の出現ではなかったろうか。

明治4年に、砂糖問屋組合が設立されたときにすでに小網町3丁目の駿河屋遠藤平三郎店と小網町仲町の石本清助が加入しており、明治5年には3丁目の大坂屋儀兵衛及び伊勢屋清左衛門の名がある。³⁹⁾そして、明治18年8月の東京砂糖問屋組合の設置願いの代表者17名の中に、小網町2丁目の中川民七、3丁目の川喜多八右衛門がいた。⁴⁰⁾

また以前よりこの時代になると、その店の数が増加した業種をみると、食塩問屋、醤油問屋、油問屋であった。そこで、改めて、砂糖問屋を入れたこの4業種の間屋名をかかげると、表8の如くである。まさに、これらの店は小網町の街並みの中での代表的な大店であったといえよう。もちろん、既述のように、これらの間屋の中には、他業種兼営のものが多い。この表では、醤油の廣屋

38) 井出徳太郎編『日本商工営業録』明治31年九月版

39) 東京砂糖貿易商同業組合『東京砂糖貿易商同業組合沿革史』p. 325, p. 351

40) 前掲書 pp. 523-524

表8 小網町4業種問屋名(明治31年)

地番	食塩問屋	地番	醤油問屋	地番	油問屋	地番	砂糖問屋
2-6	叶屋(池村憲三)	3-18	村上八重	1-2	山本源四郎	1-6	釜屋(伊藤常三郎)
8	須宮俊之助	19	茗荷屋(岡田善五郎)	5	伊藤芳次郎(石油)	2-2	伊勢屋(北村嘉兵衛)
3-4	伊勢屋(鶴岡助次郎)	25	中野長兵衛	2-3	島屋(島田新助)(荒物・油)	12	駿河屋(中川栄太郎)
9	武蔵屋(浜島常七)	27	廣屋(浜口吉右衛門)	9	日本石油精製株(石油)	3-15	伊勢屋(川喜多三右衛門)
24	勢州屋(山本東造)	28	高崎屋(高崎長左衛門)	3-1	岩槻屋(伊藤文三郎)	末広	
鑑河		〃	〃(高崎為造)	4	根本良平(石油)	河岸	
岸		29	近江屋(高梨仁三郎)	17	絹川屋(鈴木茂兵衛)	2	錫屋(方波見平兵衛)
17	伊勢屋(刀根米次郎)				(肥料・油)		
				末広			
				河岸			
				11	岩出すず(石油・油)		

『日本商工営業録』より作成

(浜口吉右衛門)や中野長兵衛、油問屋とある絹川屋鈴木茂兵衛などは、明治21年設立の「東京廻船食塩問屋及仲買組合」の組合員であった。⁴¹⁾したがって、この表8の食塩問屋名にこれらの名を加えてしかるべきかも知れない。

しかし、この明治31年における小網町の街並みは、かなり変動が激しい。2年後の明治33年の『日本商工営業録』をみても、小網町1丁目に横浜銀行、3丁目に水戸銀行のそれぞれ東京支店ができたり、2丁目には日本海上保険株式会社東京出張所ができ、また時代を反映して、洋紙店が出現する。日清製粉が小網町2丁目11番地に本社を移転してきたのも、明治41年であった。念願の東京進出だったという。⁴²⁾ただ、この明治期後半の町の変化をみても、小網町の基本的な街並みの特徴づけていたのは、やはり、前述のような伝統的な4業種とってよかろう。それに川辺町特有の廻漕運送業や旅人宿の残存こそ小網町の歴史的な姿を物語るものではなかったろうか。

更に、この町を土地所有や地価から、明治期における特徴を描き出したいと思う。

土地所有については、明治6年の沽巻図、明治9年の地主名鑑、明治45年の地籍台帳をとりあげることとする。紙数の関係から、明治45年の地籍台帳より作成した土地所有表だけを、表9にかかげておく。これはこの小網町において、誰が(職業、氏名、居住地)、どこの土地をどれだけ(所有地番)所有していたかを示すものである。

当時、一丁目は1~11番、2丁目は1~14番、3丁目は1~29番、4丁目は1~9番、仲町は1~7番までであった。表により、1丁目の地主は6人、2丁目はNo.12まで記載の地主と1丁目のところに記してある中村べん所有を含む13人、同様に3丁目は18人、4丁目は4人、仲町は4人である。これで土地の数(地番による)を割ると、いわゆる土地所有の集中係数が算出される。この

41) 鶴本重美編、前掲書 pp. 205-208

42) 『日清製粉株式会社100年史』 p. 44

表9 小網町土地所有表(明治45年)

(数字は所有地番)

No.	職業所有者名	住所	所有地番				No.	職業所有者名	住所	所有地番				No.	職業所有者名	住所	所有地番	
			1丁目	2丁目	3丁目	4丁目				1丁目	2丁目	3丁目	4丁目				4丁目	仲町
1	呉服大丸 下村正太郎	京都	1				1	荒物問屋 駒木銀三郎	◎			1.20		2	油問屋 鈴木嘉七	京橋	9-イ	
2	麻苧船具問屋 小倉久兵衛	◎	2.3				2	上に同じ 〃秀太郎	◎			2	3	銀行 安田善助	◎	9-ロ		
3	砂糖問屋 松本喜一	堀留	4.5				3	— 水野徳右衛門	深川			3	1	太物問屋 豊田平八	◎		4	
4	木綿問屋 長谷川治郎兵衛	三重	6		21		4	葉種問屋 星野興兵衛	伊勢町			4	2	荒物問屋 森友徳兵衛	◎		5	
5	荒物問屋 中村へん	◎	7.8	10	24		5	鍼力小吉 蔭山金左衛門	◎			5	3	質商 太田惣吉	新右側 問町		6.7	
6	綿糸問屋 柿沼谷蔵	◎	9 10.11				6	カツプシ問屋 高津伊兵衛	瀬戸			6	明治45年地籍台帳より作成 職業筆者調べ、居は町内居住者 1丁目1~11番、2丁目1~14番、 3丁目1~29番、4丁目1~9番、 仲町1~7番、職業欄—は不明					
1	油・荒物問屋 島田新助	◎		1.6			7	醤油問屋 浜口吉右衛門	◎		7.11	1.2.3 4.5.6 7						
2	商社 鈴木商店	神戸		2			8	砂糖問屋 大島カナ	◎		26.27 10							
3	油・荒物問屋 島田長	◎		3			9	鍋釜問屋 田中長蔵	◎		12.13							
4	乾物問屋 秋山友七	◎		4			10	油問屋 鈴木茂兵衛	◎		14.16 17.19							
5	太物問屋 植草甚七	◎		5			11	— 杉山久吉	神奈川		15							
6	安田銀行	小舟		7			12	醤油問屋 村上治兵衛	◎		18-1							
7	— 大沢いく	埼玉		8			13	醤油醸造 茂木啓三郎	野田		18-2							
8	木綿問屋 松崎ふく	◎		9			14	— 木下利吉	神田		22.23							
10	木綿問屋 川喜多久大夫	三重		11	9		15	醤油問屋 中野長兵衛	野田		25							
11	砂糖問屋 増田増蔵	横浜		12			16	茶問屋 長井利右衛門	大伝馬		28.29	仲町 1.2.3						
12	洋酒問屋 近藤利兵衛	本町		13.14														
							1	銀行 安田善四郎	小舟			8						

値が大きければ大きいほど、その町の土地が少数の地主により所有されていることを示す。また、表の◎とある町内居住の地主を、町毎にその総地主数で割ると、町内地主比となり、その町の土地が、この土地に住む者によって所有されているかどうかを示す。この2つの指標を、明治9年と明治45年とを比較してみると、表10のようである。

この表により、この小網町は、明治期を通して、2丁目を除いては土地所有の集中化が進んだとみられる。1丁目の係数値は1.33から1.83に、3丁目は更に大きく、1.11が1.61に、4丁目にいたっては、表9にあるように、9ヶ所のうち7ヶ所も浜口吉右衛門の所有地となって、その係数値

表10 小網町土地所有の推移（明治9年，45年比較）

町別	土地所有集中係数		町内地主比	
	明治9年	明治45年	明治9年	明治45年
1丁目	1.33	1.83	16.6%	50.0
2丁目	1.23	1.07	53.3	46.6
3丁目	1.11	1.61	41.3	50.0
4丁目	1.80	2.25	100.0	90.0
仲町	1.40	1.75	42.8	50.0

明治9年は『地主名鑑』，明治45年は『地籍台帳』より算出

表11 小網町及周边地平均地価（大正4年）

町名	100坪当平均地価
小網町1丁目	4230
〃 2丁目	3959
3丁目	3072
4丁目	2950
仲町	2971
堀江町4丁目	3450
小舟町1丁目	3950
〃 2丁目	3727
〃 3丁目	4266
蛸殻町1丁目	3163
北新堀町	2231
箱崎町1丁目	2533
〃 2丁目	1928
南茅場町	3224

『日本橋区史』第1冊各町土地台帳大正4年より作成

は高い。

一方、町内地主比は、1丁目がわずか16.6%であったものが50%に上がったほかは、わずかな変化しかなかった。しかし、小網町内に3ヶ所以上の土地を所有していた者は、明治5年には深川の鹿島清左衛門と久住五左衛門、それに4丁目の島田清七だけであったが、明治45年には、表9のように、小網町1丁目の荒物問屋中村茂八夫人べん、2丁目の油問屋島田新助、3丁目の油問屋鈴木茂兵衛、それに醤油問屋浜口吉右衛門のほか、大伝馬町の茶問屋長井利右衛門の名が上がる。

更に、明治45年のこうした地主をみると、業種的に多いのは、やはり時代の脚光をあびていた繊維関係の問屋——呉服・太物・綿糸——で7人、次で荒物問屋・油問屋が各4人、醤油問屋・砂糖問屋が各3人である。ここでも伝統的な4業種はこの町の中核をなすものであったといえよう。そして、明治期この町々は、すでに述べたような商業圏の拡大と共に発展をみせてゆく。人口も、明

治16年時に対して大正2年には、総数2,119人から2,759人と1.3倍になるが、殊にこの中では3丁目が488人から774人に、4丁目は755人から900人に増加をみたのも⁴³⁾、この結果であろう。

最後に、このように商業地として発展した小網町の土地の評価をみておこう。表11はこの町と周辺の関係の深い町々のそれとの百坪当りの平均地価比較である。これで見えてわかるように、小網町1丁目と小舟町3丁目のそれは、ほぼ同じ4,200円台であり、この表の他の町と比較して高い。また小網町2丁目は小舟町1丁目と同じ3,950円前後であったし、3丁目から4丁目と次第に地価が低くなるとはいえ、同じ川辺町とみなされる北新堀町や箱崎1・2丁目よりも、はるかに高い。これはやはり、小網町が川辺町でありながら後背地に商業圏を持つに至ったからではなかろうか。

43) 前掲『日本橋区史』第1冊 p. 414